三井寺

南無や大慈大悲乃観世音さし
も尊さしかりし誓ひの末
一絲一毫猶影ミあるかなきかましてや
浅猿月を縮見捉りともたる
そのみ形すまだしかそれのひ
眼りもむとおりふ心う篤かある
あり難くあまのへ思ひ子乃げ末

こゝゝーゝーゝーこゝこゝ 上音こーこーこー
はとあわぬるむく梅らは
ーーーーーこーこーーーー下ー
木ようもつく花さくへつくを
ーーーーーー三ーーーーー下ーこ
を鬼つかうぞとさけり木孫羅
ゝーゝーこーこーゝーこゝこーこーこ
子に二度ならし悲きう世く
詞
阿しき欺やはゞが膖脹のうちに
あらたなる吳曼を影ろてはを
いまかしく拔ひ清もとし園世の

人らはゞ阿りまし我にるとゆへうし
かくうりやとおもひはむ口つらく
お膖脹のうちにあらたなる
清吳曼をかうかわてんぞ我子に
ありしせ思ひて三界るへ宗禅と
あらう小清霊家拔影ろてはなく
悲歎し慘たありしとんも拔れ

ざま住きて三井寺とやらせへ

〔染ニ〕
乃ソわ作へ―　縁もなりて濃

ニ三下ヽ六ル下ニヽ三ニヽ一一一

音待てゞ月小心や急くらむ

〔早詞〕
是ハ江州園城寺乃住僧ゆてく

又是にわたらんおさなき人ハ是

愚僧を通世より侍る力なく

師弟の契約をなし申て候ハゞまさ

今夜ハ八月十五夜明月にてハ

おとえりおさなき人を伴ひ申

ばゞ講堂の庭に出月我なりめ

〔上吉〕ヽ一一

りや吹おもひく　たくひな景

一一一一一一一一一一二一一一一ニヿ

なをもち侭文裏と雷らそつく

ニニニニ二二二三二一一一下一一一一

みを急ぎ人心おもふもまつゝぬも

ニヽ一一ニ一一ヿ一六ル一一一一下ニヽ一

も誠ともかぜ我りとふや通て

後三下上

よもの月落なしみむ月影さへく
雲間より幾度袖をしぼるらん
花のふゞき吹しぼむ人志賀の
山おろしおちてかゝりめ花すみれ
瀬のよどは数乃山うつり
うへ兄ぬ響の清山と座らせを
と目能前小おの笙事よやあう

詞
花遊乃浪子やゞの横よさつら詠
あやしの宿なれども影をも能小
くるしみふかきふゞや元秋なりつゝ
まことりるゝあわゞあ濃香観や音観
うふゞ観子此ありがたハたのう
りましてまた人の観じして
いとふしのなしとうよて清観

一セイ

子乃行ゑをもしら糸の乱る
心や狂ふらん　都乃秋を捨て
遊かば　月見ぬさとにすみや
ならへとさこふ人荒れし処
よしなかも秋も月もゆかぬ哉
小阪さに義子此あはなりて
田舎もいとゞよそのみへしのぶ

小阪に心ひかの人しげく帰るさ
ざゞ波や志賀唐崎のひとつ松
みどりの数ひなくて松風に
こゝりかゞ松風もいとゞ驚
り桜さく花なる小夜をみ
里なれも子を尋まよふ風流しき
湖の水清ぐ三井寺にはやつきにけり

三井寺ふきやめならはまよにいるさの
程ハみの山三五夜すぎたる秋
隔まてあくりの秋てらの水(?)隠て
ゑすゝゑぞくらく今宵君(?)
三五夜中新月乃いろ二千里
外の故人乃ちぎり(?)猶も面白
ゆふ月なかばかなふまさ秋も
もなり秋もなりは頭(?)ろしろく
面白や　月は山風ぞ時雨てり
まほ浦うみくだりも粟津の
森乃てらうみうし濡れかゝる
せり影なれと月はものに(?)
かゝりやすゞ山田矢橋乃やゝ
舟影も寄(?)せかよふ人なくとも

月落かゝりし遠寺の夜も
この捨て出し舟人もこの
川添し世　シテ詞　面白の鐘乃声かな
我の故郷にて清見寺の鐘を
こそ常ハきゝなれしが秋の
みなし渡や三井古寺の鐘
あまさと着ハ帰る辞ハ幾さし

げにや此鐘ハ我に心ある座も
客よるぞゑて帰思しの旅なまし
龍女の成佛の縁ふのきて
まことも思ひしも浅くへつよなりや
上同
の鐘ハさえ渡りし霜夜まつく
下
げにまよや乃鐘をさえぬらす
ワキ詞
やあ〳〵暫く狂人乃身にて鐘

行く道ふゝ事思ひもよらぬ事
急いでのき給へ　三下詞〽よしや庾公が
楼上乃かゝりにも月に添ひし
ふし遊ぶ秀句ありけり由なきにしも絶
中下〽又我をさへ語る故人の玄宗
狂人衰男として鐘撞く給へる事
思ひもよらぬ事にてなく候ふ

とよ　三下〽今宵乃月に鐘撞く事
狂人とて厭ひとひ給ひすかな
詩はいろく下カル圓に吹ゝし海潮を
いゝ詞まし我舞こそとして雲衛をいふ
此後句なりけしの空ば月こ
すり清かな心をひらひてごとひ　下
一聲満るの清光いはまた衰厭なり

詞
なまじひ世どこの句哉まよひ出て
あまのわ衰うれしを小心みまし
高楼にのぼりて鐘を撞く人ゝ
いまとこそのめしに見ハ詩狂こ
其ながれと落堕人なるふに
月中は見るゝ心おもしろや
つきなぬ狂女なまき度ゆるし

ゑとこの人や人とよ婚姻乃遊め哉
さきは涅槃の声佛も志申かな
先初夜乃鐘を撞く時ハ諸行
無常と響くなり後夜の鐘を
撞く時ハ是生滅法と響く
晨朝のひゞきハ生滅
滅已入相ハ寂滅為楽と

しきそ菩提乃花の鐘ぞあり
ぼんのうも晴れて百八煩悩乃
ねむり覚ましと諸く越め来しが
迷ひもさめや波よつわや夜の
うき世も淡陸乃雲り晴て
ぎ出月の影をなほ見えたる
あさぎ 友長楽の鐘は

筆のかゝりぬ 又龍池乃
柳乃さゝ 雨のうちかけ
風か象も世に流人ごとは君
走り出て きてはかなき
木の葉の暁の空て秋の霜
暮れの月もこもれ浪初衛も
水なし数波る 風前多き鐘乃

なをはまぬや法のありなく共
山寺の春の夕くれ来て見れば
入逢乃鐘に花ぞちりける
おし免ともなき暮春こそ
ぬる世ぞ凡月の暁のかはもせを
惜みきぬ／＼暮限になう山寺
けゑすも枕乃鐘やひゞく世

ぶまの浦よひみ果けは遥くゆ暮
鐘前にもあふぬまう秋乃鳥い
鶏のはなきしも惑語の便に
なとはま遠るあつかひきくも私を
ぶ君ひ羅く私寝覚なと山厨
いつしへをいづれおりひとの鐘
うふもながみきゝ心のさひしさ小

残鐘乃声々くく思ひを尽す
暁をいその時ハかくくて過まし
月落烏啼て霜天に満ちてくく
江村乃漁火もほのかに半夜をまねく
りを衰へし我が身の上かや
過ぎにし筵宮雨きゝて涙の別
塩路のかち枕ならぬ縁うか

りける此海ハ波風も静まりて磯の
松ハしる月を受三井寺の鐘ろ
さやかなる川よ中へきこゆるのは

ワキ詞

何事にそありけり是なる物狂乃
國里我とふて鉦をうへ是ハ
思ひもよらぬ事を嘆くもことか
きわなくて座頭のうつ事みて

やすきうける物は いかにも
これなる狂女おことの国里ハ
いづく此者にて候ぞ 三詞 是ハ
駿河国清見か関のものにて候
上カル 何なふ清見か関乃者と申ハ
三詞 さてハきやうさ物狂おさなき人
御座いまそし我子千満殿

こさめ我あくめ済し一やは
ワキ詞 是なる狂女見そこなはなき城
中老が我をきう物狂小さくと
三下上カル なふ是ハ物はてれ狂ぬもなを
物にくるふも思ふ故ぞふ時ぞ
何一々狂ふへき是ハまさしき
わか子にて候は 一 さ我嬉しやこそう

わが子とわかはなれなばはなれし哉
わかゆうりつてのまゝへ　子詞　あら
此しやさのみ眼にうちとひう
口詞　言語をおりやきかせ給ひては
ば上是まほしくに御出京あらん
三下　今ハはをりにはしませへ参らず我もと
駿河國清見の関の老さわし
ば人商人乃手にわたしたてふ
おわなまし母まへ我をわたしよ
給ひてどのやうな租出給ふとい
ば遊めまならで是まいらぬなりなの里
三下　又わくらはも始まくおひつるよお落
児よふ秋し塗へなまはば道なのひ
尽ばかり秋しきさ跡ありし座のそ

上八
母はとなの御家來子思ふもて
娘をなまとと子なる迷ふ小歌乃
身ハ恥もひとめもおもひきりは
上ロ干地
急いそはし清子や冬こめも
時ハよ成物哉のふをよ泣ひ
たきのふへ う散 雁のこも
裏ふ成が染めハ きはりりほ 哀

まわてあまり猿ゝの添への御 ぞま
なひふさ姿おやとこのあんなき
清女をぬちまわとして 月さう
おかたまこよひし 歌 流が
三井寺にめくわあて 親子小
めふちなさ 尋ねそ此の母 恋
あつうそて 物狂乃なの母そとも

おとりめあはれし極へなき度
ぞ蓑ちうわ中ほゞあまおうさと
ゆとひし小ぜやうおさゐ君
ちきわよい鐘敢よ何つよあわ
嬉しさの夢乃拜りなゐえて
ともなひさちう画るツく觀子ぢ
地きわ傳よさほも富貴乃家と

なわりける之ぎまあはれ亦うふ
孝行乃徳達そめてたゐるける
はとまそめてたのかくふ